

2019年度スポーツ庁委託事業

「Special プロジェクト2020（特別支援学校等を活用した地域における障害者スポーツの拠点づくり事業）」成果報告書

2020年3月
国立大学法人弘前大学

本報告書は、スポーツ庁の委託事業として、弘前大学が実施した2019年度「Specialプロジェクト2020（特別支援学校等を活用した地域における障害者スポーツの拠点づくり事業）」の成果を取りまとめたものです。
従って、本報告書の複製、転載、引用等にはスポーツ庁の承認手続きが必要です。

1 事業趣旨

2020年の東京パラリンピック競技大会の開催、学習指導要領の改訂等、今は、喫緊の課題とされてきた障害者スポーツの推進を図るための絶好の機会である。

かつて、障害のある子供たちが継続的にスポーツ活動を実施できる環境が整っているとはいえない状況にあった。特に青森県においては、その傾向が顕著であり、障害者と健常者の共生社会の視点から見ても、健常児・者と一緒に活動するイベント等には大きな壁があり、積極的に参加できない環境であった。

このような状況を踏まえ、本学と教育学部附属特別支援学校（以下「附属特別支援学校」という。）は、スポーツ庁の「特別支援学校等を活用した障害児・者のスポーツ活動実践事業」の委託を受け、平成28年度、障害児・者と家族等それらを取り巻く人々の障害者スポーツに関する興味・関心を一層高めるとともに、本学及び附属特別支援学校が障害者スポーツ振興の地域拠点となることを目指した。

事業を進めるにあたり、「児童生徒、保護者、指導者、支援者がみんな一緒にスポーツ実践」「情報発信」を重点的に取り組んだ。その結果、スポーツを媒介として障害児・者、保護者、指導者及び支援者が一体となり、自然体で心を通わせながら一緒に活動に取り組み、スポーツへの興味や関心を高めることができた。このことにより、人と人とを結び付けるスポーツの吸引力の大きさと、今後の共生社会の形成に向けたスポーツの可能性を見出すことができた。そして、本学と附属特別支援学校において、障害者スポーツを支える人材の育成をはじめとする障害者スポーツ振興の地域の拠点となるための基盤をつくることができた。

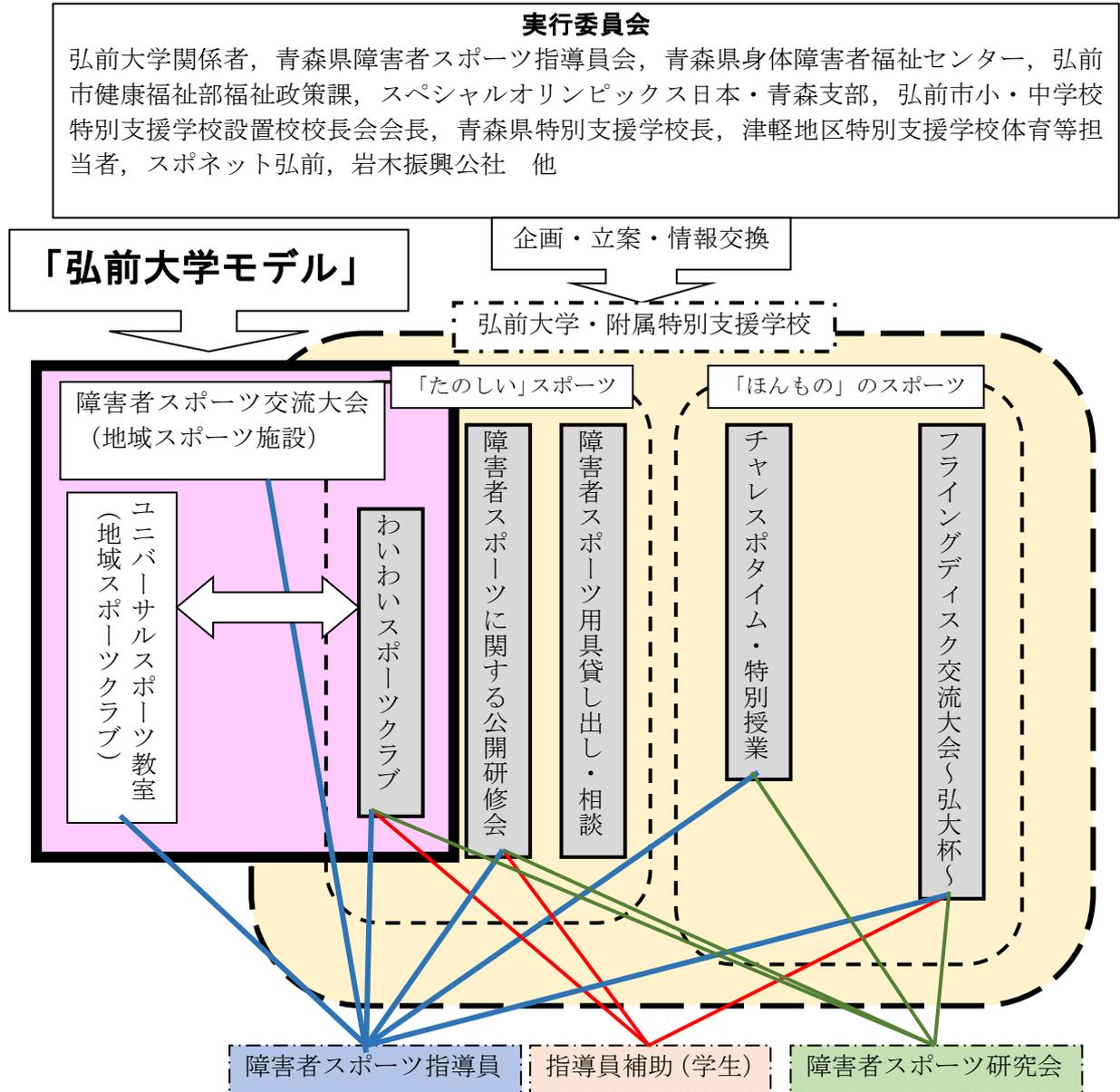
一方、障害児・者が継続的にスポーツ活動を実践するためには、スポーツ活動の幅広い体験ができる機会の拡大、保護者への情報提供の充実、そして、物理的及び人的な環境の整備を行うこと等の課題が明確となった。

この課題に対応するため、平成29年度及び平成30年度の2年間において、障害児・者がスポーツを楽しむスポーツ教室の開催等を通し、障害児・者や関係者のみならず、地域の人々が障害者スポーツへ興味や関心をもてるように、地域総合型スポーツクラブと連携し、生涯を通して継続した障害者スポーツ振興の地域拠点となる「弘前大学モデル」の構築を目指した。その結果、附属特別支援学校が主催するスポーツ教室の機会が保護者に対して参加への容易さと安心感をもたらし、参加率が格段に高まった。さらに、地域と連携し、生涯を通して継続したスポーツ活動に取り組める環境の礎を築くことができた。また、障害者スポーツにおける競技力の向上を目指し、アスリート、プロの選手及び地域のスポーツ指導員による「ほんもの」のスポーツに触れる機会を設けた結果、地域の障害者スポーツ大会への参加人数が増加した。イベントの回数を重ねることで、障害児・者の知識や経験の深まりが自信に繋がり、参加者から「健常児との交流がしたい」と前向きな意見が聞かれるようになった。しかし、第2期スポーツ基本計画で示されているスポーツを通じての共生社会の実現については、課題が依然として残ったままの状態にある。

そこで、令和元年度は、附属特別支援学校が拠点となり、障害児と健常児が共に活動するインクルーシブスポーツ教室を開催することにより、スポーツを通じた共生社会の実現に繋げることを目指す。従来は参加対象の児童生徒を地域の特別支援学級及び特別支援学校としていたが、それを全ての学校へと拡大する。これにより、参加人数が飛躍的に増加するため、実施回数を増やし、会場規模を拡大させる。

更には、従来行ってきたフライングディスク交流大会をより広域に広め、遠隔地からの大会参加等を可能とし、障害者スポーツの地域格差を解消するため、ICT機器を活用したサテライト大会の同時開催を行う。このことについては、地域の障害者スポーツ指導員が有するネットワークを存分に活かし、既に県内外各所と連携を図っている。この方法により、遠隔地からの大会参加や交流活動が活発化すると、全国規模の大会の開催にも繋がる。併せて、競技力の底上げやアスリートの発掘に繋がる大会となり、相乗効果で生まれる大会の活性化は参加者が障害児・者及び彼らを取り巻く全ての人々の意欲を高め、スポーツを通じての共生社会を実現させる。

2 事業実施体制



- *それぞれの活動において，関係者及び関係機関がそれぞれの役割を果たしながら，連携したスポーツ活動を実施する。
- *本学が主催する「わいわいスポーツクラブ」，地域の団体が主催する「ユニバーサルスポーツ教室」の活動種目を共通のものとするすることで，障害者スポーツの振興を図る。その上で，練習の成果を発揮する場を「障害者スポーツ交流大会」として設定する。

3 活動方針

平成28年度「特別支援学校等を活用した障害児・者のスポーツ活動実践事業」を通して，障害者スポーツを支える人材の育成を含め，それぞれの役割で参加する障害者スポーツへの広がりや可能性が明らかになった。

平成29年度は，「Specialプロジェクト2020」の実施により，障害者スポーツ振興の地域の拠点となるための取組を通して，参加者は様々なスポーツを経験することで，興味・関心の幅が更に広がった。一方，スポーツ教室の開催に関し，地域と連携して取り組む必要性が明確となった。

平成30年度は，2年間の取組を通して明らかとなった課題である「地域連携」に重点を置きながら事業を展開し，「弘前大学モデル」として，生涯を通してスポーツ

ができる環境の基礎を整備した。同時に、障害者スポーツ指導員による専門的な授業を通して、競技への意識の高まりに繋げる活動を展開した。

4年目である令和元年度は、インクルーシブスポーツを通じた共生社会の構築に向けてのスポーツ教室を開催する。また、ICT機器を活用することにより遠隔地からの大会参加等を可能とし、障害者スポーツの地域格差の解消を目指すとともに、競技力の底上げやアスリートの発掘に繋がる活動を推進する。

4 事業内容

(1) 実行委員会

ア 目的

- ・附属特別支援学校を拠点に、インクルーシブスポーツを通じた共生社会の構築に繋げるため、地域と連携したスポーツ教室の開催についての実施方法や内容等を検討する。
- ・大学及び附属特別支援学校を拠点に、ICT機器を活用し、他県からの大会参加を視野に入れたフライングディスク交流大会や、同年代のアスリート選手との交流等の計画立案及び実施について検討する。

イ 期日 第1回目 令和元年 5月31日(金) 13:30～16:00
第2回目 令和2年 2月4日(火) 13:30～16:00

ウ 構成委員 弘前大学教育学部長，弘前大学教育学部事務長，弘前大学教育学部事務長補佐，弘前大学教育学部特別支援教育科准教授，弘前大学教育学部体育科講師，青森県障害者スポーツ指導員会会長，青森県身体障害者福祉センター所長，弘前市健康福祉部福祉政策課，スペシャルオリンピックス日本・青森支部，スポネット弘前，岩木振興公社，青森県特別支援学級設置校長協議会弘前支部，青森県立特別支援学校校長代表者，津軽地区特別支援学校担当者，弘前大学教育学部及び附属特別支援学校（事務局）

エ 実行委員会案件

第1回目

- ・2019年度スポーツ庁委託事業「Specialプロジェクト2020」について
- ・「第3回フライングディスク交流大会」について
- ・「弘前大学モデル」について
- ・「障害者スポーツ研究会」について

第2回目

- ・2019年度スポーツ庁委託事業「Specialプロジェクト2020」の報告
- ・4年間の成果と課題，次年度の方向性について
- ・「弘前大学モデル」リーフレットについて
- ・今後の展望について

オ 成果と課題

【成果】

- ・スポーツ活動拠点の構築や活動内容等，今後の方向性について，地域社会を取り巻く各関係機関からの意見をもとに，地域での取組の可能性を検討し，次年度へ向けての方向性を見出すことができた。



【課題】

- ・スポーツ活動の情報発信
- ・指導者及び場所の確保
- ・共生社会の構築に繋がる活動場所の在り方

(2) 実践研究の取組内容

ア 目的

(ア) 附属特別支援学校を拠点とした障害児・者の地域スポーツクラブ活動の推進

- ・障害者スポーツ指導員による「たのしい」をテーマとしたスポーツ教室において、インクルーシブスポーツを通じた共生社会の構築を図る。

(イ) 附属特別支援学校における体育・運動部活動の推進

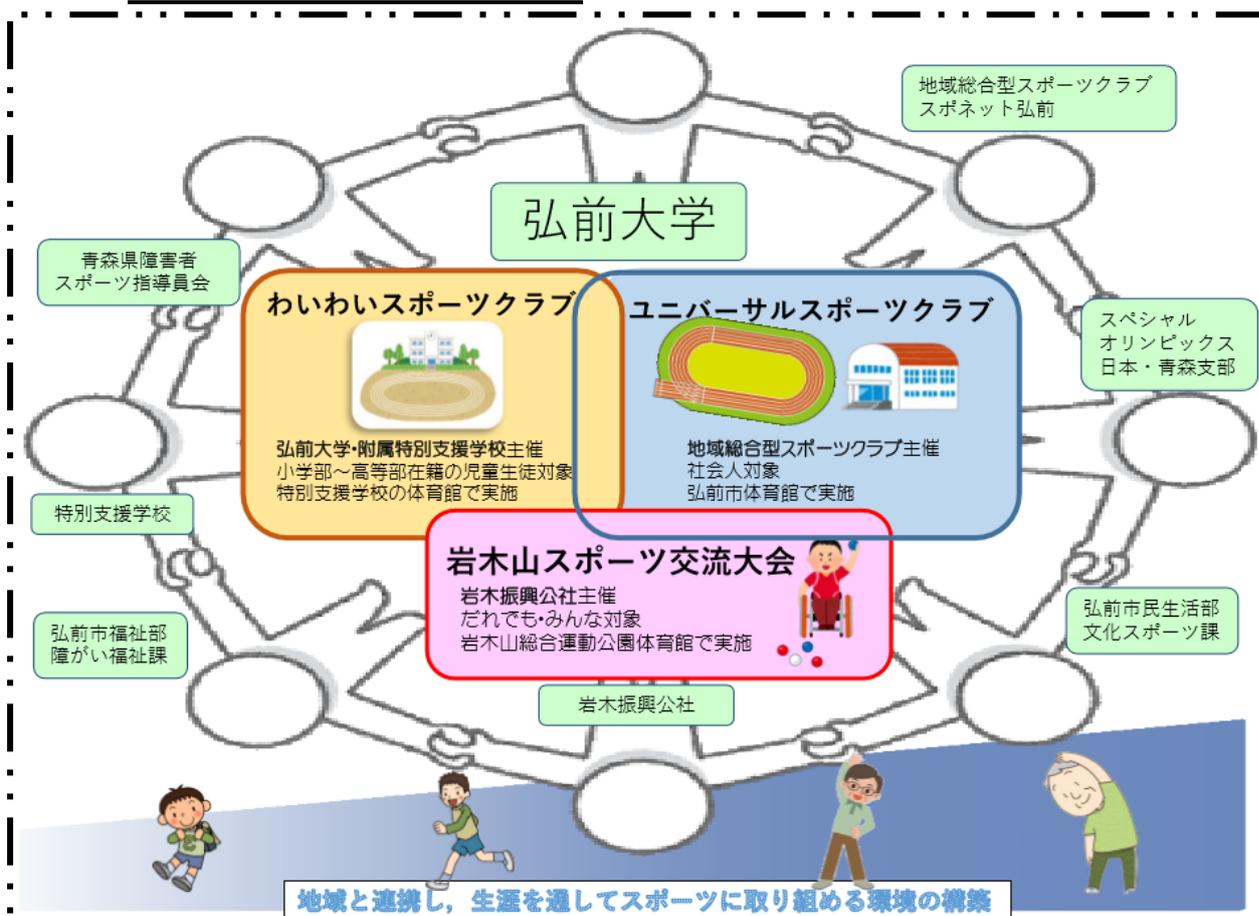
- ・ICT機器を活用した遠隔地からの大会参加を通して、同年代のアスリート選手との交流や他県の選手との競技経験を活かし、目標を高く掲げることにより、スポーツ活動参加の促進を図るとともに、アスリートの発掘及び育成を目指す。

イ 取組内容

(ア) 特別支援学校等を拠点とした障害児・者の地域スポーツクラブ活動の推進

①弘前大学モデル

a 「弘前大学モデル」地域連携図



b わいわいスポーツクラブ（主催：弘前大学，教育学部附属特別支援学校）

(a) 期日	1回目	令和元年	6月 8日 (土)	13:00~15:00
	2回目	令和元年	6月29日 (土)	13:00~15:00
	3回目	令和元年	7月26日 (金)	13:00~15:00
	4回目	令和元年	8月 8日 (木)	13:00~15:00
	5回目	令和元年	8月31日 (土)	13:00~15:00
	6回目	令和元年	10月12日 (土)	13:00~15:00
	7回目	令和元年	11月30日 (土)	13:00~15:00
	8回目	令和元年	12月26日 (木)	12:30~15:00
	9回目	令和2年	1月18日 (土)	12:30~15:00
	10回目	令和2年	2月 8日 (土)	12:30~15:00

(b) 会場 弘前大学教育学部附属特別支援学校体育館

(c) 内容・講師

1回目	フライングディスク・齋藤誠（青森県障害者フライングディスク協会）
2回目	フライングディスク・齋藤誠（青森県障害者フライングディスク協会）
3回目	ボッチャ・福沢和彦（青森県障害者スポーツ指導員）
4回目	ボッチャ・福沢和彦（青森県障害者スポーツ指導員）
5回目	バスケットボール・益川満治（弘前大学教育学部講師）
6回目	バスケットボール・本間正行（弘前大学教育学部学部長講師）
7回目	スポーツチャンバラ・増田貴人（弘前大学教育学部准教授）
8回目	サッカー・姜暁一 他（NPO法人弘前Jスポーツプロジェクト）
9回目	サッカー・姜暁一 他（NPO法人弘前Jスポーツプロジェクト）
10回目	サッカー・姜暁一 他（NPO法人弘前Jスポーツプロジェクト）

(d) 参加者	1回目	参加者16人，スタッフ11人
	2回目	参加者48人，スタッフ12人
	3回目	参加者57人，スタッフ11人
	4回目	参加者60人，スタッフ14人
	5回目	参加者16人，スタッフ15人
	6回目	参加者13人，スタッフ15人
	7回目	参加者11人，スタッフ10人
	8回目	参加者44人，スタッフ16人
	9回目	参加者24人，スタッフ11人
	10回目	参加者32人，スタッフ16人

(e) 参加者の声

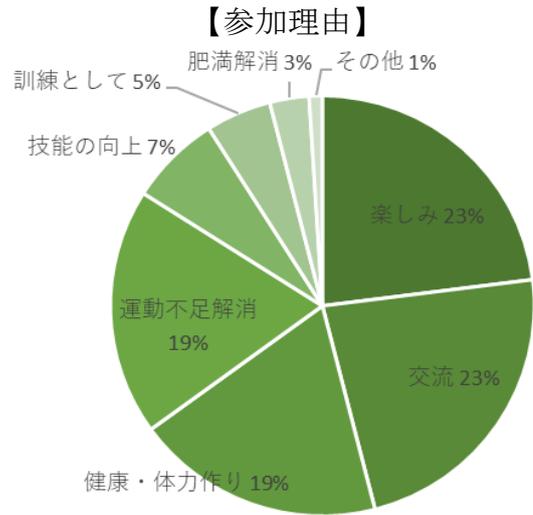
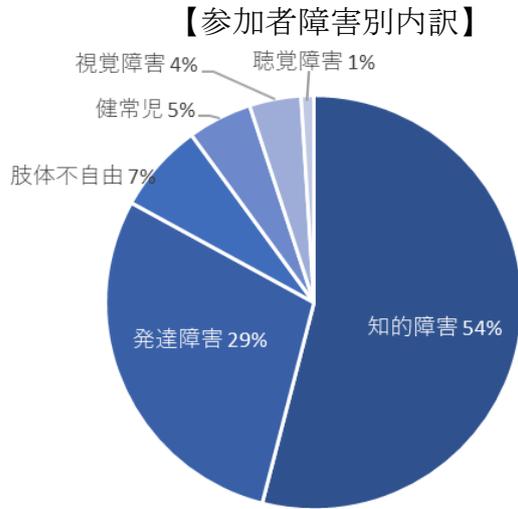
- ・わいわいスポーツクラブでの経験により自信がつき，他のスポーツイベントへの参加へ繋がった。
- ・地元のスポーツ選手に教えてもらったことで，地元のスポーツチームを応援するようになった。
- ・なかなか他のクラブへ参加するのは難しいが，学校が開催会場であるため，安心して参加できた。

(f) 「わいわいスポーツクラブ」に期待すること

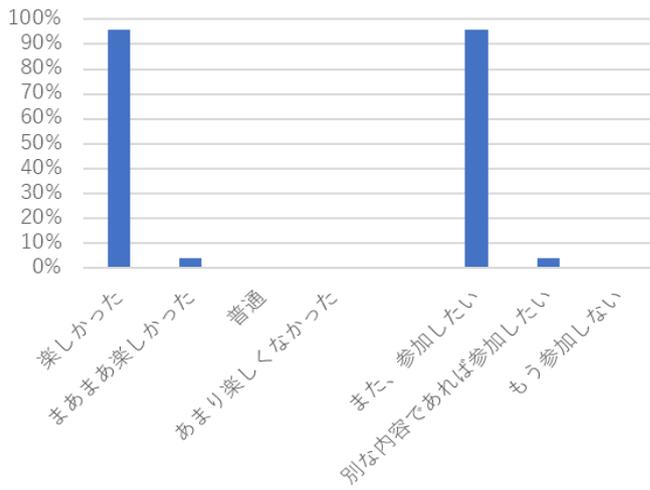
- ・継続開催！！
- ・ルールの理解（説明）
- ・いろいろな種目の経験
- ・いろいろな人との交流

- ・聴覚障害，視覚障害の方の参加
- ・余暇活動の経験

(g) 評価指標



【参加満足度】



サッカー



フライングディスク



バスケットボール



スポーツチャンバラ



ボッチャ



(h) 成果と課題

【成果】

わいわいスポーツクラブは、障害のある子供たちにとって、学校を会場に「気軽に参加できる」スポーツ教室であり、昨年度より参加者が増えた。また、個々の経験の拡大や自信の獲得により、自主的に地域施設が開催するスポーツクラブに参加する子供たちが見られるようになった。上記の2つの成果から、スポーツを通じた社会参加の広がり、自主的にスポーツに係わる機会の増加へと繋がっていることが明らかとなった。

【課題】

インクルーシブスポーツをねらいに開催したが、健常者の参加率が低かった。原因は、附属特別支援学校を会場にしたことで、障害のある人を対象としたスポーツ活動と認識されたのではないかと考えられる。次年度は、地域のスポーツ施設を活用し、インクルーシブスポーツの普及へと繋げる。

c ユニバーサルスポーツクラブ（主催：地域総合型スポーツクラブ）

(a) 期日 平成31年4月～令和2年1月 土曜日 年間31回

(b) 会場 弘前市身体障害者福祉体育館

(c) 内容 ボッチャ、卓球バレー、フライングディスク 他

(d) 参加者の声

- ・これまで機会がなかったから、定期的にあるのが嬉しい。
- ・青森市のスポーツ教室へ行けないので、地元で開催されて嬉しい。
- ・運動する場がないので、毎週開催してほしい。

(e) 評価指標

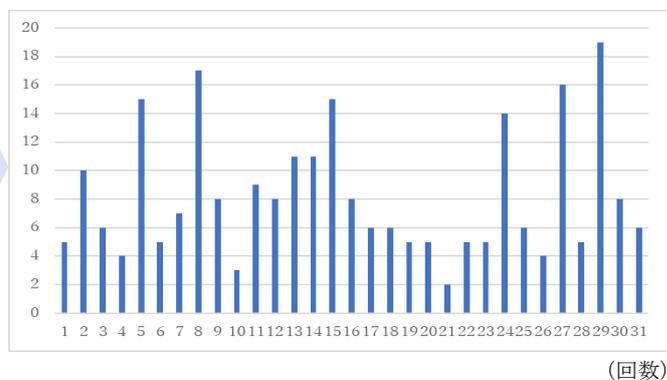
平成30年度 実施回数 22回 → 令和元年度 実施回数 31回

【参加者】

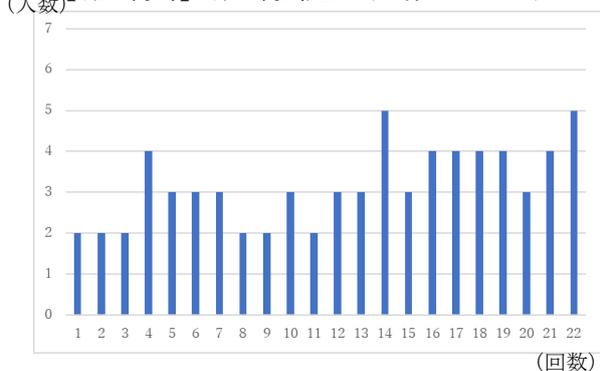
参加延べ人数 146人
1回あたりの参加者人数 6.6人



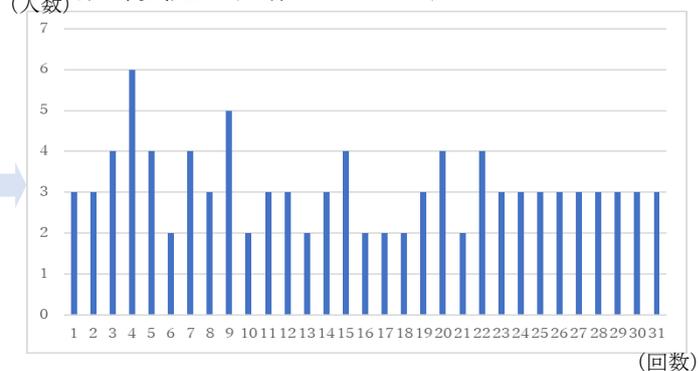
参加延べ人数 254人
1回あたりの参加者人数 8.1人



【指導員】指導員延べ人数 70人



指導員延べ人数 97人



(f) 今後の展望

- ・開催時期によっては参加人数が多くなり、スタッフが不足することがある。次年度はスタッフ確保の方法について検討する。
- ・卒後の余暇支援に繋がるように運動の場を増やし、開催場所も考慮する。
- ・2025年の全国障害者スポーツ大会に向けて、楽しむスポーツだけでなく、競技力の向上にも力を入れる。

d 第2回岩木山スポーツ交流大会～ボッチャ交流大会～（主催：岩木振興公社）

(a) 期日 令和元年9月21日（土）

(b) 会場 岩木山総合公園体育館

(c) 内容 ボッチャ

(d) 所感

ボッチャはメディアで紹介される機会が増加し、急激に認知度と関心が高まった。大会参加となるとまだ遠慮してしまっていると感じた。だが、昨年度より参加者が微増となったのは、ボッチャの競技人口が増加しているからであろう。参加者の技術も向上しているため、昨年度よりレベルの高い試合となった。

(e) 今後の展望

ボッチャの正式ルールでは障害の種類やレベルによってクラス分けされ、チーム戦のみの参加など、軽度障害者や個人単位では参加できない大会がある中、岩木山総合公園のボッチャ大会は、家族や兄弟、チームでの参加も多く、更に障害の有無の参加条件もなく、誰でも参加できるので、当日は非常に和やかな雰囲気の中で行われた。岩木山総合公園のボッチャ大会はこの雰囲気を大切に、来年度以降も継続開催したい。



e 「弘前大学モデル」 成果と課題

【成果】

実行委員会を通して、地域の各関係機関と連携したスポーツ活動拠点に繋がる組織が構築されたと共に、定期的なスポーツ教室を開催することができた。また、障害児・者の余暇活動の充実や、健康の維持増進をねらいに開催したことにより、参加者も増加傾向にあり、ニーズがあることが明らかとなった。

【課題】

今年度から、インクルーシブスポーツをねらいに活動したが、各イベントとも健常児・者の参加が少なかった。活動場所やイベントの情報発信不足が原因と考えられる。また、特別支援学校や福祉体育館に限らず、地域の体育施設を活用すると共に、リーフレットの作成等を行い、インクルーシブスポーツの普及に繋げていきたい。

②障害者スポーツに関する公開研修会

a 期 日 令和2年1月10日（金） 13:20～16:00

b 会 場 弘前大学教育学部附属特別支援学校体育館

c 内 容 「インクルーシブスポーツをやってみよう！」
講 師 講師 澤江幸則氏（筑波大学 体育系 准教授）

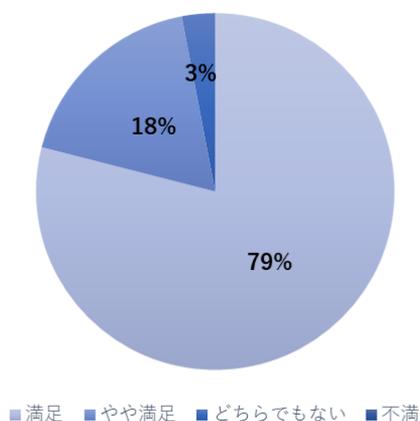
d 参加者 54名（本校職員、県内特別支援学校、近隣の関係施設等）

e 参加者の声

- ・このような研修を継続して開催してほしい。
- ・講義（座学）だけではなく、実技も取り入れたら良いと思う。
- ・インクルーシブスポーツ大会に高齢者も加えてほしい。
- ・イベントを企画するにあたり大変参考になった。
- ・「休憩時間を一緒に」というのが印象的だった。
- ・弘前市のアドバイザーになっていただきたい。筑波大学や弘前大学の同様の分野の先生と連携したい。

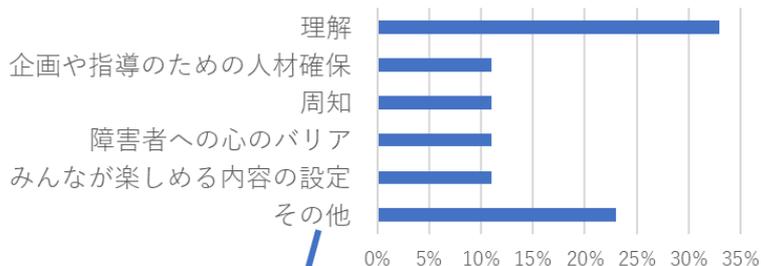
f 評価指標

【研修会の満足度】



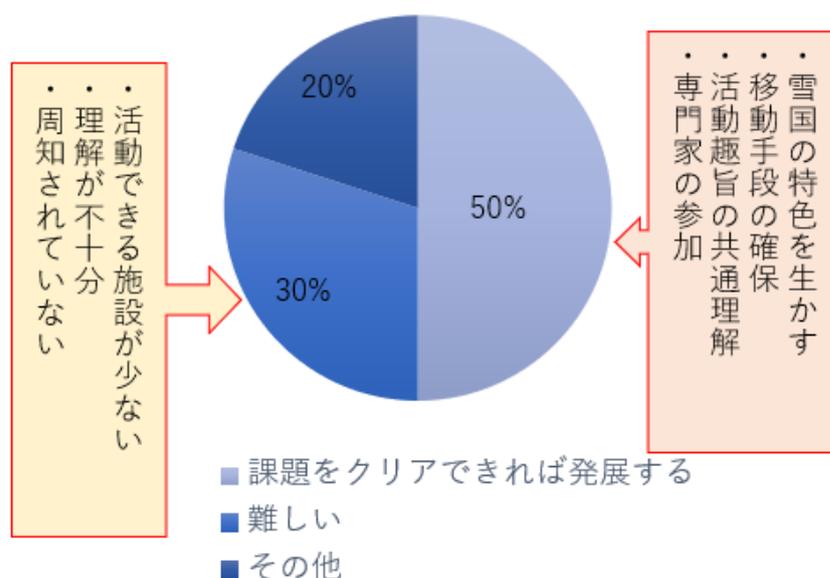
※「不満」は、0%

【インクルーシブスポーツを進める上で課題となるもの】



選手や施設の確保、運営する団体の設立、場に応じたルールの設定

【青森県におけるインクルーシブスポーツの可能性】



g 成果

【成果】

インクルーシブスポーツの実践例を交えた講演内容に、参加者は具体的なイメージをもちながら受講することができた。さらに参加者は、居住地でのインクルーシブスポーツの可能性や将来像を考える機会となった。今後、地域でインクルーシブスポーツを展開していく中で、サポーターが増えることが期待される。



③ 障害者スポーツ用具の貸出・相談

a 期日 令和元年7月～10月

b 内容 スポーツ用具の貸し出し・相談

c 件数

- ・用具の貸出（フライングディスク、ボッチャ等） 5件
貸出先：県内特別支援学校，岩木山総合運動公園，弘前市スポーツイベント
- ・派遣指導（県立M学校 フライングディスクの講習） 1件
- ・相談（活動内容の組み立て方，支援方法等） 3件

d 成果

【成果】

用具の貸出を行うことにより、「障害者スポーツを経験できる機会が増えた」という感想があった。また、近隣の特別支援学校に限らず、地域のスポーツ機関やイベント等においても、相互による用具の貸借が増加しており、スポーツ経験の広がりにも繋がっていることが示唆される。また、スポーツに関する相談から、障害者スポーツ指導員への情報の橋渡しがなされ、地域の学校とスポーツ機関との繋がりが強化された。

④第3回フライングディスク交流大会～弘大杯～

a 期日 令和元年7月6日（土）9：00～11：50

b 会場 弘前大学第一体育館

c 日程

8：20～	9：20	受付
9：20～	9：35	開会式
9：40～	10：20	講習会
10：30～	11：40	競技
11：40～	11：50	閉会式

d 参加者 選手 153名
内訳：本校児童生徒55名、県内特別支援学校80名、
福島県18名
青森県障害者フライングディスク協会審判員14名
学生役員44名

e 競技種目 アキュラシー

f その他

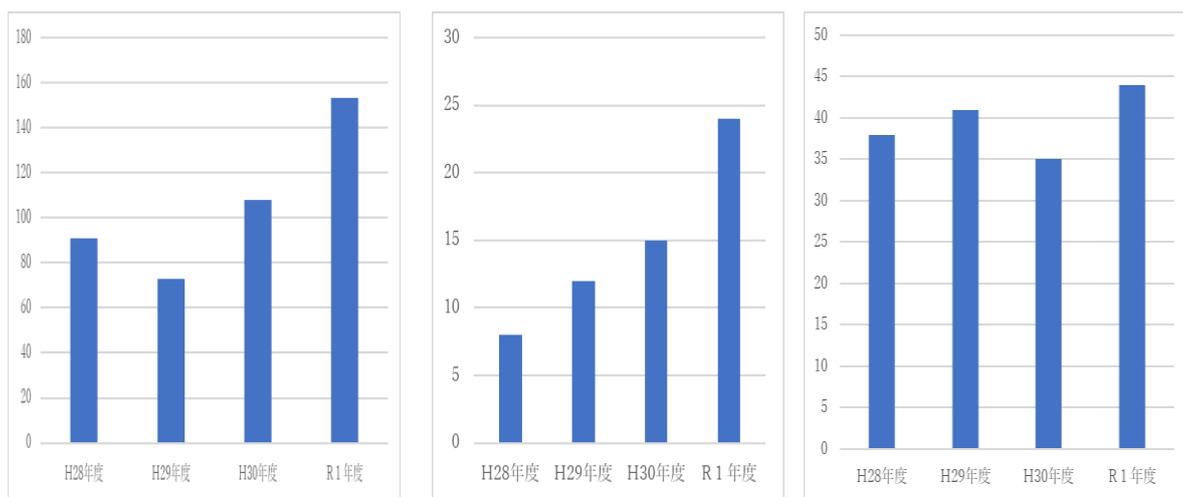
- ・障害者スポーツ「ボッチャ」体験コーナーを設置
- ・弘前市役所：障害者支援ショップ「hug work」を設置

g 参加者の声

- ・大会で初めてメダルをもらえて、本人もとても喜んでいました。
- ・福島県とのサテライト開催すごいですね。良かったと思います。
- ・子供は2回目、私は初めての参加です。家とは違う集団の中で頑張る姿に感動しました。来年もぜひ参加したいです。
- ・普段出会うことのない異年齢の子たちや学校の違う子との関わりが、子供たちの成長に繋がると感じました。
- ・知っている子の応援をして、お互い褒め合い、交流を深めることができました。
- ・フライングディスクを買って家族で楽しみたいと思いました。
- ・地域を超えて交流する機会になり、とても良かったです。
- ・たくさんの子供たちが参加して、活気あふれる大会でした。
- ・たくさんの参加者がいてびっくりしました。本競技だけでなくボッチャや練習場があって、空いた時間に利用できるのは良いと思いました。

h 評価指標

【過去4年間の参加者数】 【過去4年間の審判員数】 【過去4年間の学生役員数】



i 成果と課題

【成果】

平成28年度から4年間連続で開催している本大会は、フライングディスク協会指導員や学生役員等、多種多様な人材との連携による円滑な大会運営が定着し、参加者も回を重ねるごとに増加している。今年度は、初の試みであるICT機器を活用したサテライト大会を開催した。交通の便が悪く、いろいろな人との交流が難しかった地域の子供たちが、モニターを通していつもと違うメンバーとスポーツ交流することができた。また、県内では優勝経験の多い子供が、普段と同じ環境の中にいながら、全国大会に出場している子供と競技することができたことにより意欲が高まり、競技力の向上へ繋げることができた。

【課題】

スムーズな大会進行と地域格差の解消のためにICT機器の環境を整備していくとともに、他県の選手との競技スポーツを通じた交流を図る。



<福島県>



<青森県弘前市>



ICT 機器を用いてスポーツ交流が図られている様子



5 事業成果

(1) 事業成果

本事業の実行委員会を中心に、地域における障害者スポーツ振興に繋がる活動が円滑に行われた。また、それらの活動を通して成果と地域の課題が明確になった。

一つ目は、スポーツを通じた共生社会の実現を目指し、「弘前大学モデル」のシステムを利用して、インクルーシブスポーツ教室を開催したことで、実行委員会を中心

とした、地域組織の構築や連携の強化を図ることができた。一方、障害のある児童生徒の参加者は増加傾向にあったが、健常児・者も一緒に参加するインクルーシブスポーツ活動に繋がるには至らなかった。

二つ目は、障害者スポーツの地域格差を解消するため、ICT機器を活用したサテライト大会の同時開催を行ったことにより、地域格差が原因でスポーツ交流の機会が少なかった人たちの問題を解消することができた。競技に対する意欲の向上や交流の機会の広がりが見られたことは大きな成果であり、今後の新たなスポーツ活動へと発展させる契機となった。

上記のことから、本事業の実施に伴い、地域の各関係機関との連携が強まり、インクルーシブスポーツを通じた共生社会の構築に繋げるための課題が整理され、次年度へ向けた活動の方向性が明確になった。

(2) 既存事業・体制と本事業との関係（P19 付録1参照）

平成28年度「特別支援学校等を活用した障害児・者のスポーツ活動実践事業」を通して、障害者スポーツを支える人材の育成を含め、支援者や指導者等それぞれの役割で参加する障害者スポーツへの広がりや可能性が明らかになった。

平成29年度は、「Specialプロジェクト2020」の実施により、障害者スポーツ振興の地域の拠点となるための取組を通して、参加者は様々なスポーツを経験することができたことで、興味・関心の幅が更に広がった。一方、スポーツ教室の開催に関し、地域と連携して取り組む必要性が明確となった。

平成30年度は、2年間の取組を受けて明らかとなった課題である「地域連携」に重点を置きながら事業を展開し、「弘前大学モデル」として、生涯を通してスポーツができる環境の基礎を整備した。同時に、障害者スポーツ指導員による専門的な授業を通して、競技への意識の高まりに繋げる活動を推進した。

4年目である令和元年度は、インクルーシブスポーツを通じた共生社会の構築に向けてスポーツ教室を開催したことで、地域の課題が明確になった。また、ICT機器を活用することにより遠隔地からの大会参加が可能となり、障害者スポーツの地域格差の解消、競技力の底上げ、アスリートの発掘に繋がり、今後のスポーツ活動の進展に繋がった。

(3) 事業課題

本事業の評価指標やアンケート結果から、スポーツを通じた共生社会の実現に向けて次のような課題が考えられる。

参加人数の飛躍的な増加と活気あるインクルーシブスポーツによる交流を期待していたスポーツ教室では、附属特別支援学校に足を運ぶ健常児・者が少なく、インクルーシブなスポーツ活動には至らなかった。今後、地域を巻き込んだインクルーシブスポーツを通じた共生社会の実現に向け、これまで学校が主体となり学校が活動の場となって実施してきたスポーツ活動を、附属特別支援学校がコーディネーターとなり、地域総合型スポーツクラブや地域のスポーツ施設との連携をより強化して、地域のスポーツ施設や人材を有効活用することで、インクルーシブスポーツの普及と拡大を図るための環境整備に取り組む必要性が示唆された。

さらに、文部科学省「幼児期運動指針」に、「幼児期に運動を調整する能力を高めしておくことは、児童期以降の運動機能の基礎を形成するという重要な意味を持っている。」また、「幼児にとって体を動かす遊びなど、思い切り伸び伸びと動くことは、健やかな心の育ちも促す効果がある。また、遊びから得られる成功体験によって育まれる意欲や有能感は、体を活発に動かす機会を増大させるとともに、何事にも意欲的に取り組む態度を養う。」と明記されていることを踏まえ、幼児期から地域コミュニティへの参加を可能にする、身体運動の環境整備の必要性が見えてきた。

上記の課題から、本事業の実行委員会の機能を最大限に活用しながら、地域連携を強化し、更なる環境整備やスポーツ活動の推進に取り組んでいきたい。

2019年度スポーツ庁委託事業
「Special プロジェクト2020（特別支援学校等を活用した
地域における障害者スポーツの拠点づくり事業）」

実行委員名簿

	氏名	所属・役職
1	福 沢 和 彦	青森県障害者スポーツ指導員会・会長
2	竹 内 雅 宣	青森県身体障害者福祉センター・主事
3	川 口 晃 世	青森県立弘前第二養護学校・校長
4	木 崎 達 広	青森県立弘前聾学校・校長
5	佐 藤 龍 太	弘前市 福祉部 障がい福祉課・主幹
6	長谷川 竜 太	弘前市市民生活部文化スポーツ課・総括主査
7	船 水 威 徳	弘前市市民生活部文化スポーツ課・主事
8	三 國 美 香	スペシャルオリンピックス日本・青森支部
9	鹿 内 葵	総合型地域スポーツクラブ スポネット弘前・理事長
10	工 藤 直 樹	指定管理者（一財）岩木振興公社・業務主任
11	相 馬 省 進	青森県特別支援学級設置校長協議会 弘前支部・支部長 (弘前市立松原小学校 校長)
12	福 田 寛	青森県立弘前第一養護学校・教諭
13	小 猿 隼 也	青森県立弘前第二養護学校・臨時講師
14	村 山 幸 貴	青森県立森田養護学校・教諭
15	河 内 亜 衣	青森県立黒石養護学校・教諭
16	小松崎 瞬	青森県立浪岡養護学校・教諭
17	戸 塚 学	弘前大学教育学部・学部長
18	三 上 徹	弘前大学教育学部・事務長
19	小笠原 裕 一	弘前大学教育学部・事務長補佐
20	増 田 貴 人	弘前大学教育学部・准教授
21	益 川 満 治	弘前大学教育学部・講師
22	本 間 正 行	弘前大学教育学部・学部長講師
23	川 村 泰 弘	弘前大学教育学部附属特別支援学校・校長
24	高 橋 寿	弘前大学教育学部附属特別支援学校・教頭
25	岡 田 一 也	弘前大学教育学部附属特別支援学校・教諭
26	勘 林 秀 平	弘前大学教育学部附属特別支援学校・教諭
27	及 川 望 美	弘前大学教育学部附属特別支援学校・事務部主任
28	中 嶋 実 樹	弘前大学教育学部附属特別支援学校・教諭

弘前大学教育学部附属特別支援学校 地域連携部員

	氏名	所属・職名
1	木 村 恵利子	弘前大学教育学部附属特別支援学校・教諭
2	鳴 海 愛 子	弘前大学教育学部附属特別支援学校・教諭
3	鳥 潟 昌 也	弘前大学教育学部附属特別支援学校・教諭
4	勘 林 秀 平	弘前大学教育学部附属特別支援学校・教諭
5	佐々木 美 鶴	弘前大学教育学部附属特別支援学校・講師
6	工 藤 まゆみ	弘前大学教育学部附属特別支援学校・教諭
7	中 嶋 実 樹	弘前大学教育学部附属特別支援学校・教諭

スポーツ庁委託事業 「Specialプロジェクト2020」 における4年間の取組

